

日本語慣用句の成り立ち： 理論的な枠組みと発生のメカニズム¹

浙江财经大学 方 小 贊

1. はじめに

慣用句は、生きた表現として日常では多用されている。ただし、森田（1966:63）が「慣用的な言い方は日常生活の中にごく自然に使用されているもののなかではあるが、しかし、それが多用されているということと、その理解が容易であるということとは、別である」と指摘した通り、異なった文化背景で育ってきた外国人日本語学習者にとって慣用句の意味を正確に把握するのは非常に困難であると思われる。それは慣用句の意味特徴に大きく関わるからだと考えられる。

では、慣用句とは何か、意味にはどのような特徴があるのか。本稿では、慣用句を二つ以上の単語からなり、構成要素の簡単な総和では決まらないような特定の意味を全体としてもつ言葉と考える。例えば、「頭を抱える」という慣用句は人の頭を抱える動作を表現するのではなく、その文字とおりの意味から意味拡張されて困り果てるといった慣用的な意味になる。つまり、慣用句には構成語の字義的な意味と全体としての本当の意味とがあり、意味的には二重性を持つということである。また、慣用句はその国の文化や習慣などを反映する独特の表現であり、文化などの要素もしばしば慣用句の意味に付与されている。

従来の研究では宮地（1982）、森田（1985）、林（2002）などのように、慣用句を構成上や表現上の特徴、意味や文化の側面などから考察したものは多くある。また近年、伝統的な意味論や先行研究では慣用句の意味拡張およびその発生のメカニズムが説明されていないという点が意識され、認知言語学の方法論でそれらの問題点を解決しようとする研究も盛んに行われている。例えば、初山（1997）、有蘭（2008）、庄司（2010）などが挙げられる。これを受けて、本稿では、このような認知言語学の立場から日本語慣用句の意味成立の理論的な枠組みと発生のメカニズムを検討する。

¹ 基金項目：この論文は「杭州市哲学社会科学常規性规划課題（D13YY02）」「浙江省社会科学界联合会研究課題（2013Z74）」「浙江省教育厅科研項目（Y201329078）」の研究
成果である。

2. 理論的な枠組み

慣用句の最も顕著な特徴は、慣用句を構成する各部分の総和では決まらないような特定の意味を全体としてもつところにある。すなわち、慣用句としての意味は構成要素の字義的な意味の単純な総和ではなく、ある一定の仕組みによって構成要素の字義的な意味や働きが派生されることによって成立するということである。先行研究ではすでに明らかにされているように、比喩が慣用句の意味領域において積極的な働きをしている（宮地 1982,1985,1999；中村 1985）。では、認知言語学において比喩はどのように扱われてきたかを見てみよう。

認知言語学における比喩研究に中心的な貢献をした Lakoff & Johnson は彼らの著作 *Metaphors We Live By* (『レトリックと人生』) において、伝統的な比喩観とは異なり、*Metaphor is pervasive in everyday life, not just in language but in thought and action* (言語活動のみならず思考や行動にいたるまで、日常の営みのあらゆるところに比喩は浸透している)、*On the basis of linguistic evidence, most of our ordinary conceptual system is metaphorical in nature* (言語上の根拠から、日常用いられている概念体系の大部分が本質的に比喩から成り立っている)、*Human thought processes are largely metaphorical* (人間の思考過程の大部分が比喩によって成り立っている) と指摘する。つまり、彼らは従来文章技巧の問題として言語学では周辺的な現象として扱われてきた比喩を、日常の言語活動に必須の認知能力として捉えている。その結果、これまで言語の問題とされてきた比喩の問題は、単に言語だけの問題ではなく、人間の概念の問題へ移行することになり、こうした概念体系が人間の行動様式にも影響を与えていると考えられるようになった。彼らは比喩が概念体系や認識の基盤に関わると主張している。

Gibbs (1994:1) においても、「人間の認知は根本的にさまざまな詩的ないし比喩的過程によって形成され」、また、メタファー、メトニミーの働きについては「人が経験と外的世界を概念化する際に用いる基礎的な枠組みを構成しているものである」と指摘している。すなわち、通常の言語表現もいわゆる慣用句の意味も身体的な経験に基づいて認知プロセス、ここではメタファーやメトニミーのような一般的な拡張の法則に従って、意味が広がっていくために、慣用句としての意味が成立するということである。したがって、慣用句に対して意味付けをする際により根本的なところ、すなわち身体的な経験からの説明によって、その慣用句の

成立をある程度体系的に明らかにすることができると考える。

認知言語学では、こうして抽象的で捉えにくい概念を、より具体的で理解しやすい概念に基づいて理解する認知プロセスをメタファーと捉えている。そのプロセスに従って、われわれの概念体系の中には、ある（具体的な）概念と別の（抽象的な）概念との間に対応関係が生まれると考える。概念体系の中に形成されたこの概念と概念の対応関係を、Lakoff & Johnson (1980) は概念メタファーと呼んでいる。また、Lakoff (1987,1993) は Lakoff & Johnson (1980) のメタファー理論をさらに発展させ、メタファーを概念領域間の「写像 (mapping)」として、「起点領域」(source domain) から「目標領域」(target domain) へとイメージ・スキーマを写像するものと定義づけている。たとえるものが属する領域を「起点領域 (source domain)」、たとえられるものが属する領域を「目標領域 (target domain)」と呼んでいる。概念メタファーの写像を図示すれば、次の図1 になる。

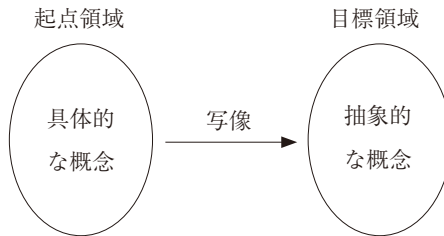


図1 メタファーによる概念間の写像

一方、認知言語学の他の立場では、比喩はある事柄を表現するために、その事柄をそれと何らかの関係のあるもう一つの事柄にたとえて表現する認識上のプロセスであると考えられている。比喩は認知プロセスの結果生まれたものであり、多くの場合、認知の基礎として目に見える事物の空間上の位置・移動の知覚を出発点として、その知覚を他の領域に転用拡大することにより多義語などを作る。その際、主として3種のメカニズムが働いている。それは、類似関係に基づく隠喩（メタファー）、隣接関係に基づく換喩（メトニミー）、包摂関係に基づく提喩（シネクドキ）の三つである。

初山（2002）は、メタファーを「二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩」

と定義する。例えば、「裕子は職場の花だ」では、「裕子」と「花」は異なる領域に属するが、両者が「華やかさ」という点に類似することによって、「花」で「裕子」を表すようになる。

また、メトニミーを「二つの事物の外界における隣接性、さらに広く二つの事物・概念の思考内・概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喻」と定義している（靱山 2002）。例えば「やかんが沸騰している」という場合、「やかん」を目印とし、それと近い関係にある「（やかんの中の）水」が沸騰していると理解しているのである。

シネクドキに関して、瀬戸（2005:129）は、それをより大きなカテゴリー（類）とより小さなカテゴリー（種）との間の包摂関係に基づく意味的伸縮現象であると定義している。例えば、「花見」は、「花」という「類」で「桜」という「種」を表すシネクドキである。

以上から、慣用句は比喻と大きく関わっており、Lakoff らが提唱する概念メタファーや靱山、瀬戸らが提唱するメタファー、メトニミー、シネクドキなどの認知プロセスによって、比喻が慣用句の意味拡張に機能していると考えられる。それを検証するため、次の3節では具体的な例を提示しながら、身体語彙慣用句発生の一般的なメカニズムについて考察する。

3. 日本語慣用句発生のメカニズム

この節では、Lakoff らが提唱する概念メタファーや靱山、瀬戸らが提唱する3種のメカニズムに基づき、慣用句の意味拡張の仕組みを、概念メタファーによる、拡張メタファーによる拡張、メトニミーによる拡張、メタファーとメトニミーの両方による拡張という4つのタイプを提示して、慣用句発生のメカニズムを分析する。

(1) 概念メタファーによる拡張

概念メタファーが具体的に慣用句の成立にどのように機能するのかについて、「心を配る」という慣用句を検討することによって明らかにする。例えば、「温度の調節と食物にさえ心をくばるなら、まず半年は生存する²⁾」に見られるような「心を配る」は「配慮する」という精神的なことを意味する。「心」はそもそも「人

²⁾ この例文は『日本語慣用句辞典』からの引用である。

間の精神作用のもとになるもの。また、その作用」を表し、実体のないものである。実体のない抽象的な「心」をどのように理解したらいいかは非常に困難である。そのため、「心を配る」というさらに抽象的な概念を理解するのは一層難しいことになる。ここでは、「心」のような抽象的なものによる慣用句がどのようなメカニズムによって成立したのか、またその成立のプロセスがどのようなものなのかについて論じてみる。

具体的には、Lakoff & Johnson (1980) の「概念メタファー (conceptual metaphor)」と Lakoff (1987) の「写像 (mapping)」を用いて、具体的で理解しやすいものから抽象的な「心」へ写像することによって、「心」の分析を試みる。つまり、実体のない「心」を実体のある「モノ」に見立てることにより、「心はモノである」という概念メタファーが作用し、「心」を実体を持つ「モノ」として理解することができる。

また、「配る」は本来モノを「分けて与える、配分する」という意味を持つ。そして、そのモノに関する「分けて与えられる、配分できる」のような特徴はメタファーの投射によって、抽象的な「心」までに広がる。これに従って、「心を配る」という慣用句が成立するのである。このように、概念メタファーは「心」のような抽象的な概念だけでなく、その「心」から構成される慣用句の発生においてもメカニズムとして機能することが分かる。なお、その慣用句の発生のプロセスは以下の図2のようになる。

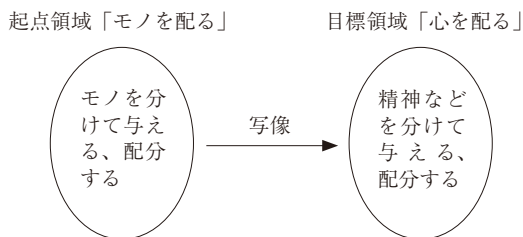


図2 メタファーによる「心を配る」の写像

(2) メタファーによる拡張

慣用句発生に関して、メタファーによる拡張がどのように発生するかについて、「目の上のこぶ」という慣用句の分析を通して論じていく。

「目の上のこぶ」は「何かと目障りであったり、邪魔になったりするもの」のたとえである。ここで、「目」は身体部位としての目と理解してよい。「こぶ」が人の目の上にあるというのは実際には起こりにくいものであるが、もし目の上にこぶができたとしたら、物が見づらくなり、すなわち見る行為にとって、邪魔になったりするはずである。このように、この慣用句は「目の上のこぶ」という具体的で視覚に関わるものがメタファーによって抽象化され、「何かと目障りであったり、邪魔になったりするもの」を表すようになると考えられる。

(3) メトニミーによる拡張

メトニミーも慣用句の発生において大きな役割を果たすと考えられ、ここでは、日本語の「口が多い」という慣用句を例に考察することにする。

「口が多い」を文字通りに解釈すれば、「人の体に多くの口が付いている」ということになり、この解釈は、その文脈あるいは現実からどう見てもあり得ないことであり、不自然なものである。このように、文字通りの意味と文脈との間には、理解のずれが生じている。そこで、ある一定の仕組みによって文字通りの意味がほかの意味に転移されるように推論が働くと考えてみる。

その意味転移のプロセスは次のように考えられる。「口が多い」の「口」は「言葉」の意味を表している。それは「身体部位でその身体部位の行う行為」のメトニミーによって、「口」に「ものを言う」という意味が発生し、さらに、「行為で結果」のメトニミーによって、「ものを言う」から「言葉」という意味を表すようになり、「口」の「言葉」という派生義が成立したと考えられる。「多い」にはそのまま「量がたくさんある」という意味が生きている。このように、メトニミーに基づいて、慣用句全体は「多弁である、言葉が多い」という意味になる。

(4) メタファーとメトニミーの両方による拡張

ここでは、「頭が切れる」という慣用句の発生のプロセスを実際の使用例を見ながら、説明していく。「彼は頭が切れる人だ」という例文を取り上げることにしてよう。まず、「頭が切れる」の字面の意味から解釈すれば、「彼は頭が刃物のように切れ味が鋭い人だ」ということになる。この解釈は、その場面あるいは文脈からどう見てもあり得ないことであり、違和感がある。このように、字面の意味と文

脈との間には、理解のギャップが生じている。そこで、「頭が切れる」というのはある一定の仕組みによって字面の意味と異なるほかの意味に転移されるように推論が働くと考えられる。

「頭が切れる」の文字通りの意味を慣用句としての意味である「思考力などが鋭く、優れている」につなげていくには、メタファーとメトニミーという認知のプロセスが関わってくる。すなわち、「頭」は「思考力」の意味を表していて、これは「身体部位でその身体部位の機能」のメトニミーによって得た意味である。「切れる」は本来「刃物が鋭くて、機能がよい」という意味であるが、ここでは「鋭い」という特徴に基づいて、抽象的な「機能がよい、鋭く、優れている」という意味に派生される。これはメタファーが関わっていると判断できる。このように、メタファーとメトニミーの両方によって「頭が切れる」は「頭の思考力などが鋭く、優れている」という意味が成立したと捉えることができる。したがって、「頭が切れる」の慣用句成立のメカニズムはメタファーとメトニミーの両方が重要な働きをしていることが分かる。

以上のようにこの3節は、概念メタファーによる拡張、メタファーによる拡張、メトニミーによる拡張、メタファーとメトニミーの両方による拡張という4つのタイプを示して慣用句の発生のプロセスを論じてきた。その結果、メタファーやメトニミーが身体語彙慣用句の意味拡張およびその発生のメカニズムにおいて重要な役割を果たしていることが分かった。

4. 慣用句教育への示唆

前述したように、日本語の慣用句には構成語の字義的な意味と全体としての本来の意味とがあり、意味的には二重性を持つため、外国語を母語とする日本語学習者にとってそれは難しい学習項目になる。例えば、「口を拭う」という慣用句を見よう。「口を拭う」は文字通りの意味では、物を食べた後、口を拭いて口元をきれいにする行為を表す。ここから抽象化されて、悪いことをした後で、さも、何もしていないかのように振舞うという慣用句の意味を表している。その文字通りの意味と慣用句の意味は異なる領域に属し、痕跡が見えないようにするという共通点に基づいてメタファーによる写像が起こったと捉えることができる。ただし、

実際に学習者はその慣用句を、食事を済ませたあと、口のあたりの汚れをふき取って満足そうな様子と想像しやすい。つまり、学習者は慣用句の文字とおりの意味に焦点をあてやすく、抽象化した慣用句の本当の意味を推論できないことが多い。そのため、日本語慣用句教育においては、従来の教育法とは異なり、メタファーやメトニミーの理論を生かすことによって慣用句発生の原因を究明し、その結果を学習者に教えるほうが慣用句の意味を理解するのに役立つと考えられる。

5. まとめ

本稿は認知言語学の観点から、日本語の慣用句成立の理論的な枠組みと発生のメカニズムについて検討した。結果としては、認知言語学の手法を用いて、伝統的な意味論や先行研究では説明できなかった慣用句の意味拡張およびその発生のメカニズムを明らかにすることができた。慣用句の意味の成り立ちは認知言語学におけるメタファーやメトニミーの認知プロセスで推論できると言える。また、メタファーやメトニミーを用いて慣用句の意味および発生の原因を推論し、その結果を日本語学習者に伝えたほうがより効率的だと考える。

参考文献：

- [1] 有蘭智美「『顔』の意味拡張に対する認知的考察」『言葉と文化』（名古屋大学大学院・国際言語文化研究科） 2008 年
- [2] 林八竜『日・韓両国語の慣用的表現の対照研究：身体語彙慣用句を中心として』明治書院 2002 年
- [3] 庄司明子「日英語イディオムの認知的研究」東北大学博士論文 2010 年
- [4] 瀬戸賢一『よくわかる比喩：ことばの根っこをもっと知ろう』研究社 2005 年
- [5] 中村明「慣用句と比喩表現」『日本語学』1月号 明治書院 1985 年
- [6] 宮地裕『慣用句の意味と用法』明治書院 1982 年
- [7] 宮地裕「慣用句の周辺－連語・ことわざ・複合語－」『日本語学』1月号 明治書院 1985 年
- [8] 宮地裕『敬語・慣用句表現論』明治書院 1999 年
- [9] 初山洋介「慣用句の体系的分類－隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に」『名古屋大学国語国文学』1997 年

- [10] 舩山洋介『認知意味論のしくみ』研究社 2002 年
- [11] 森田良行「慣用的な言い方」『講座日本語教育』第二分冊 早稲田大学語学教育研究所 1966 年
- [12] 米川明彦・大谷伊都子編『日本語慣用句辞典』東京堂出版 2005 年
- [13] Gibbs, Jr. R. W. *The Poetics of the Mind: Figurative Thought, Language, and Understanding*. Cambridge University Press, 1994.
- [14] Lakoff, George and Mark Johnson. *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press, 1980. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳『レトリックと人生』大修館書店 1986 年)
- [15] Lakoff, George. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. University of Chicago Press, 1987. (池上嘉彦・川上誓作他訳『認知意味論』紀伊国屋書店 1993 年)
- [16] Lakoff, George. "The Contemporary Theory of Metaphor," In Andrew Ortony ed., *Metaphor and Thought*, second edition, Cambridge University Press, 1993.